

貧しい者の富

2006. 7. 30 (日)
西軽井沢福音センターにて
ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

マタイの福音書 5章3節

「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。」

マタイの福音書 6章9節、10節

「だから、こう祈りなさい。『天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。御国が来ますように。みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように。』」

マタイの福音書 6章33節

「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」

あるドイツの出版社の息子が、ドイツのテレビ局の方に、次のように尋ねられました。「あなたにとって最も大きなショックとは、いったい何でしょうか。癌になることでしょうか。全財産を急に失くすことなのでしょうか。或いは、一生涯車椅子で生活することでしょうか。財産家の息子の答えは、「もし、人間を造られた方、生けるまことの神様がおられるならば、それこそ私にとっては考えられないショックとなるでしょうね」と。

生けるまことの神がおられるならば、死は終わりとはなりません。それは、必ず死後さばきを受けることになるからです。つまり、天国行きか地獄行きかのどちらかです。

「地獄」とは、永久的に光が見えず、平安がなく、喜びも、希望もないまま永遠に存在しなければならぬということになるのです。それは考えられないほど恐ろしい状態です。

天国について、聖書は記しています。

ヨハネの黙示録 21章4節

「もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。」

と。

だからこそ初代教会の兄弟姉妹は、確信して証しました。

ローマ人への手紙 8章18節

今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。

一昨日は、K 姉妹の葬儀でした。ご主人である Y 兄弟は、昨日電話で感謝していました。「彼女は、今すでにイエス様とともに主の栄光にあずかったから羨ましい」と。

名古屋集会の A 兄弟の納骨式は、今度の土曜日の午後、行なわれるようになっていきます。兄弟はいつも英語で、「See you again！」或いは、「また天国で会いましょう！」と言われました。

このように生きる希望を、またはっきりとした確信を持っていない人は、本当にかわいそうです。それは、行く先が真っ暗やみであるからです。私たちの目的は天国でなければ、全てむなしく、心を満たすものはほかにありません。

福音書を読むと、はっきりわかります。驚くべきことですが、私たちの主イエス様は、天国の栄光についてよりも、地獄の恐ろしさについて話されたのです。

では、永遠に滅びないで天国に入るために、何をしたらよいのでしょうか。

今、司会の兄弟の読まれた箇所の中に、はっきり書かれています。小さくなることです。貧しくなることです。つまり降参することです。ダビデ王のような態度をとることです。

ダビデは、次のように告白しました。(現在の政治家を見ると考えられない話ですが、)ダビデは、

詩篇 86 篇 1 節

私は悩み、そして貧しいのです。

詩篇 86 篇 2 節

私は神を恐れる者です。

もし、今日ここに来られた一人一人が、このように告白することができれば、素晴らしいと思います。「私は悩み、そして貧しいのです。私は神を恐れる者です。ですから、私は祈っています」と。

今日の集いも、「悩む者の集い」、「貧しい者の集い」、「主を恐れる者の集い」となりますように。

今、読まれましたマタイ伝 5 章 3 節は、非常に有名な箇所です。

マタイの福音書 5 章 3 節

「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。」

心の貧しい者は幸せ。結局、天国はその人のものだからです。

「貧しい者の富」についての箇所ではないでしょうか。このことばこそ、みこころにかなう者の目的と要求が何であるかを表わしているのではないのでしょうか。

それは、「御国」であり、「神の国」であり、「永遠の世界」であり、つまり「天国」です。言うまでもなく、大切なことは心の態度であり、その他の外側の諸問題は、心の態度によって解決されるのです。

また、6 章 3 3 節です。多くの人たちのよく知っているみことばです。

マタイの福音書 6章33節

「神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」

結局、主を第一にすれば、目的が天国であれば、必要なものすべて、必ず与えられます。

では、「天国」はどのようなことを言うのでしょうか。今読みましたマタイ伝6章9節、10節を読むと、答えは明らかです。「天国」とは、主のご支配なさっているところです。天国は、絶対的な義、揺るぐことのない平安、また、とこしえの喜びの満ちたところです。イエス様は言われました。

マタイの福音書 6章9節、10節

「だから、こう祈りなさい。『天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。御国が来ますように。みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように。』」

まさにここにこそ、「天国とは何か」という問いに対する答えが記されているのではないかと思います。

天国は、主の御名のあがめられるところです。主のみこころそのものが行なわれるところです。天国においては、主の御名があがめられ、みこころが行なわれるのです。

その際大切なことは、この地上においても天国が実現し、主の御名があがめられ、みこころが行なわれることです。これこそ、主のご目的であり、私たちの目的でもあるのです。

主の恵みを味わうようになり、罪の赦しを働なしに受け、そして主イエス様との交わりによってあらゆる重荷から解放されるなら、もうすでにこの世において始まっている天国のようなものなのではないでしょうか。

けれど、最終的な天国の成就是、イエス様が目に見える形で再びこの地上に来られる時になされます。主イエス様こそ、かつてご自身を無にしてくださったお方で、天国の王なのです。

イエス様のご支配が明らかになると、いつでも天国があります。即ち、これが「義」と「平安」と「喜び」です。そういう意味で、イエス様に頼る者は、すでに天国を体験的に味わい知ることができるのではないのでしょうか。誰でも罪と債務を持ったそのままの状態、小さくなって主イエス様のみもとに行くなら、イエス様の平安、またイエス様の喜びにあずかるようになります。

当然の話ですが、「目的」というものは、人間の行ないを決定するものです。非常に残念なことですが、現代人の多くは目的を持っていません。「どうして生まれたの?」「どうして生きなければいけないの?」「死んでからどこに行くの?」と。大部分の人間は、目的がなく考えようとしません。そうすると、現在の生活とは、働いて、食べて、寝ることだけになるのではないのでしょうか。結果として、生活に倦み疲れてしまうことになるのです。

確かにある人たちは、「いや、違う。はっきりとした目的を持っている」と言うかもしれませんが。けれども、質問してみると大した目的ではありません。例えば、財産を貯えることです。有名人になることです。けれど、このように次元の低いものによっては、人間の心は満たされません。

イエス様に頼る者の目的は、「主の栄光と誉れとなるように」ということなのです。そしてまた、この地上で天国が明らかに現わされることです。

では、どういう人たちが天国に入るのでしょうか。イエス様の答えは、はっきり、「心の貧しい者たち」だとおっしゃっています。

もちろん、心が貧しいということは、良いことではありません。「霊的に貧しい」ということは、祝福ではなく、反対に呪いのようなものではないでしょうか。

霊的な貧しさは、聖霊の訓練から逃げようとするところから生じるものです。その反対に、霊的に豊かな人は、イエス様のために多くの患難を通して苦しんだ人たちです。多くの苦しみや悩みを通して、彼らのうちにイエス様が形造られるのです。このように、霊的に富んでいる人はこの幸せを、ほかの人にも分け与えることができるのです。

けれど、「心が貧しい」とは、いったいどういうことなのでしょう。

・「心が貧しい」とは、主の光の前で自分の貧しさ、みじめさを認めることです。

イザヤ書の57章、よく知られている箇所ですが、聖書全体の語ろうとしていることをまとめていることばでしょう。

イザヤ書 57章15節後半

「わたしは、高く聖なる所に住み、心砕かれて、へりくだった人とともに住む。へりくだった人の霊を生かし、砕かれた人の心を生かすためである。」

主の呼びかけ、主の素晴らしい約束です。

「心の貧しい人」とは、例えて言うならば、主の前におけるあわれな乞食のような者です。心砕かれている者です。へりくだっている者です。そして、主の光によって自分のみじめさ、自分のむなしさを知るようになった者です。また、そういう人たちは、自分には主のみこころにかなったものが一つもないことを知るようになった人たちです。

例えば、ルカ伝18章、みなさんよく知っている箇所ですが、いわゆる取税人、(即ちローマ帝国という敵国のために税金を集めた人たち)のことなのですが、このルカ伝18章に出てくる取税人こそ、主の求めておられる心の貧しい者でした。

彼は本当に心からそう思って願いました。「神さま。こんな罪人である私をあわれんでください。主があわれんでくださらなければ、望みは全くありません」。

9節から読みましょう。

ルカの福音書 18章9節から13節

自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりパリサイ人で、もうひとり取税人であった。パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈り

をした。『神よ。私はほかの人々のようにゆるる者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』

「自分を義人だ」と思う人は、自分はOKだということになります。二人は「祈るために」エルサレムの宮に上りました。パリサイ人とは、当時の聖書学者、立派な生活を送った尊敬された人格者でした。

イエス様の判断はすごいでしょう。

ルカの福音書 18章14節前半

「あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。」

義と認められることとは、罪の赦しを受けることだけではなく、その人は一度も罪を犯さなかったかのようにされることです。理性では、理解できません。想像もできません。けれど、「義と認められること」とは、そういうことなのです。

それから、聖書全体が語ろうとしていることは、

ルカの福音書 18章14節後半

「だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」

そういう貧しい人たちが捜し求められています。

パウロは、結局、そのような人だったのではないのでしょうか。彼は、自分自身について書いたことがあります。「私は、主のしもべたちの中では最も小さい者であって、使徒と呼ばれる価値のない者です。私のことはそれでもいい」と。

「全ての聖徒たちのうちで、またイエス様を信じる者たちのうちで、一番小さな私」と、彼は言うようになったのです。「イエス様を信じる人はたくさんいるけれど、一番小さいのは私です」と彼は言いました。

また、殉教の死を遂げる前に、テモテという愛弟子に書いたのです。

テモテへの手紙・第一 1章15節

「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。

「一番ひどいのは私です」と。「心の貧しさ」とは、そういうものです。

イエス様を知らない人たちは、誇りをもって、自分勝手な道を歩もうとします。実際、救われていない人たちは、乞食よりも貧しい者です。それがわかるようになれば、救いは近いのではないのでしょうか。従って、心の貧しい者となることこそ、一番大切なことです。つまり、主の霊によって自分の本当の姿を知り、恐れおののいて、自分からは何も期待することのできない人となるのが大切です。

心の貧しい者は、自分が弱く、貧しい者であり、本当にみじめであわれな存在にすぎない者であることを認めることです。このことを本当に知る人だけが、思うところの全てを超越して豊かに施すことのできる方、つまり、イエス様を知るようになります。

おごり高ぶる者や本当に心砕かれていない者は、約束も望みもなく、呪いのもとに置かれると聖書は記しているのです。

「心が貧しい」とは、いったいどういうことなのでしょう。

・もう一つの答えは、コリント第二の手紙に書き記されています。イエス様についての箇所です。

コリント人への手紙・第二 8章9節後半

主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富む者となるためです。

人間は、「富む者」とならなければ、人生は的外れなものとなります。

イエス様の偉大さについては、人間がいくら考えても、また聖書を読んでも、理解できません。全く想像することもできません。

聖書は、「イエス様によって全てが造られた、イエス様のためにこの大宇宙が創造された」と記しています。

このイエス様は、始めのない、終わりもない、永遠なる神であります。永遠から生きておられるお方です。この主イエス様が、全人類を救うために、三十三年間、この地上におられ、私たちのためにご自身の自由意志で貧しくなられたのでした。

「イエス様の貧しさ」とは、いったいどういうことなのでしょう。

それは父なる神に対してご自分から選ばれた「依存」です。「わたしは何もできません。わたしは何を話したらよいか全くわかりません。どうしたらよいのですか。父に教えていただかなければ、父に導いていただくことなしには、何もできません」と、イエス様は何度も言われました。

ヨハネ伝の中から幾つかの箇所をちょっと読んでみましょう。全部イエス様の言われたことばであり、イエス様の啓示そのものです。

ヨハネの福音書 5章19節前半

そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。子は、父がしておられることを見て行なう以外には、自分からは何事も行なうことができません。」

「子」とは、イエス様です。

5章30節前半

「わたしは、自分からは何事も行なうことができません。ただ聞くとおりにさばくのです。」

6章38節

「わたしが天から下って来たのは、自分のところを行なうためではなく、わたしを遣わした方のみところを行なうためです。」

7章16節

そこでイエスは彼らに答えて言われた。「わたしの教えは、わたしのものではなく、わたしを遣わした方のものです。」

8章28節

イエスは言われた。「あなたがたが人の子を上げてしまうと、その時、あなたがたは、わたしが何であるか、また、わたしがわたし自身からは何事もせず、ただ父がわたしに教えられたとおりに、これらのことを話していることを、知るようになります。」

12章49節

「わたしは、自分から話したのではありません。わたしを遣わした父ご自身が、わたしが何を言い、何を話すべきかをお命じになりました。」

14章10節

「わたしが父におり、父がわたしにおられることを、あなたは信じないのですか。わたしがあなたがたに言うことばは、わたしが自分から話しているのではありません。わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざをしておられるのです。」

14章24節

「わたしを愛さない人は、わたしのことばを守りません。あなたがたが聞いていることばは、わたしのものではなく、わたしを遣わした父のことばなのです。」

今読みましたルカ伝18章のみことばも、イエス様のことばというよりも、み父の教えられたことばでした。結局、イエス様は、考えられないほど貧しくなられました。

人間になられる前に、イエス様は何でも知っておられましたし、何でもおできになりました。人間になることによって父から離れられたので、何もおできにならないこととお知りになったのです。イエス様は、父なる神から聞いたことだけをお語りになり、父なる神が行なわれたことだけを行なわれたのです。イエス様は決してご自分で勝手にすることはなさいませんでした。

その意味で私たちは、イエス様のおとりになられた態度と全く異なっています。私たちは、やはり何かを聞いたり見たりすると、自分で考えるのです。それから判断するのです。イエス様はそういうことを一瞬たりともなさったことがありません。まず、「お父様。あなたはどのようなお考えですか。わたしはどうしたらよいのですか。全くわかりませんから教えてください」と、イエス様はいつも思われたのです。結局、父に全く拠り頼んで、いつも父のみところに服従なさったのは、主イエス様です。

イエス様の最大の祈りは、「わたしの思いではなく、あなたのみこころがなるように」。これこそ、イエス様の絶えずとられた態度でした。

恵みとあわれみに富んでおられたイエス様は、たとえ困っている人がみもとに行っても、決して自分勝手な行動はされず、常に父なる神のみこころだけを行なわれたのです。これこそ、「心が貧しいこと」にはほかならないのではないのでしょうか。

最後に、もう一つの質問について考えたいと思います。

私たちは、「天国は自分のものなので幸いである」と言える、心貧しい人たちに属しているのでしょうか。それともいないのでしょうか。

今まで、人間と主との正しい関係に入ることにについて考えてきました。その際、だれが天国に属し、だれが天国に属さないかということに全てがかかっていることがわかりました。

天国に入るための条件とは、次のものです。イエス様ははっきり言われました。
ヨハネの福音書 3章3節後半

「人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」

このニコデモという男は、聖書全体を徹底的に研究した男で、疑わずに信じました。主のために生きたいと思ったのですが、彼は新しく生まれ変わっていなかったのです。

どうしても必要な条件は、新しく生まれ変わることです。そして、新しく生まれ変わることは、人間の努力の結果ではありません。聖書の勉強をした結果でもありません。聖霊の働きによるものです。

ヨハネの福音書 3章6節

「肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。」

ヨハネの福音書 3章5節後半

「人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国にはいることができません。」

- ・人は、御霊の働きによって、初めて自分の罪や主に対するそむきなどがわかるようになります。
- ・人は、御霊の働きによって、初めてイエス様の流された血潮の価値を知るようになります。流された血潮を感謝する者は、この流された血潮の力を体験するようになります。
- ・人は、御霊の働きによって、初めて自分の罪が赦されていることと、永遠のいのちが与えられていることとを知り、また、確信するようになります。

このようにして、人は新しく造り変えられるのです。今まで主を拒んでいた者が、主を喜んで受け容れる者となります。このようにして、生き生きとした信仰を持つ者は、喜んで主に従いたい、主に用いていただきたいと願うようになります。

天国の王であられるイエス様は、「わたしの国はこの世のものではない」と言われたのです。ですから、イエス様は当時の人たちに否定され、十字架上で殺されたのです。もし、

イエス様が、「わたしの国はこの世のものです。ローマ帝国に対して反対しましょう。戦いましょう」と言われたなら、イスラエル人は例外なく、命懸けで戦ったに違いありません。けれどイエス様は、「わたしの国はこの世のものではない」と言われたので、十字架につけられるということになりました。

マタイの福音書 18章3節

「あなたがたも、悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、はいれません。」

とイエス様ははっきり言われました。

天国の約束は、だれに当てはまるのでしょうか。心砕かれ、本当に悔い改めた人です。旧約聖書の中で、次のような箇所があります。

歴代誌・第二 7章14節

「わたしの名を呼び求めているわたしの民がみずからへりくだり、祈りをささげ、わたしの顔を慕い求め、その悪い道から立ち返るなら、わたしが親しく天から聞いて、彼らの罪を赦し、彼らの地をいやそう。」

主は、人間一人一人に対して、癒したい、救いたい、解放したい、まことの喜びで満たしたいと心から望んでおられます。だれでも心を開くならば、新しい世界を知るようになります。

八人の証しを聞きましょう。

1. まず、マナセという王についてです。

歴代誌・第二 33章12節

しかし、悩みを身に受けたとき、彼はその神、主に嘆願し、その父祖の神の前に大いにへりくだって、

悩みを身に受けたとき、その時初めて、マナセはその神、主に嘆願し、その父祖の神の前に大いにへりくだったのでした。結果として、彼は奇蹟を経験しました。つまり解放されたのです。

2. ヨブは、

ヨブ記 42章6節

自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。

と書いてあります。

3. ダビデは、

詩篇 34篇18節

主は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、たましいの砕かれた者を救われる。

詩篇 51篇17節

神へのいけにえは、砕かれたたましい。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。

詩篇 138篇6節前半

まことに、主は高くあられるが、低い者を顧みてくださいます。

4. 息子であるソロモン王は、

箴言 16章19節

へりくだって貧しい者とともにいるのは、高ぶる者とともにいて、分捕り物を分けるのにまさる。

箴言 29章23節

人の高ぶりはその人を低くし、心の低い人は誉れをつかむ。

箴言 22章4節

謙遜と、主を恐れることの報いは、富と誉れといのちである。

と告白したのです。

5. ミカという預言者は、

ミカ書 6章8節後半

主は何をあなたに求めておられるのか。それは、ただ公義を行ない、誠実を愛し、へりくだってあなたの神とともに歩むことではないか。

と主はミカを通して言われたのです。

6. イザヤは、次のように書いたのです。

イザヤ書 29章19節

へりくだる者は主によっていよいよ喜び、貧しい人はイスラエルの聖なる方によって楽しむ。

とあります。

7. そして、イエス様は、

マタイの福音書 23章12節

「だれでも、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされます。」

と言われました。

8. ヤコブは、
ヤコブの手紙 4章6節後半

「神は、高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお授けになる。」

最後に、三つの例を考えて終わりたいと思います。

1. ある聖書学者つまり律法学者が、イエス様のもとにやってきました。彼は教養のある人で、聖書には精通しておりました。彼は、正直にイエス様に質問しました。イエス様の答えは、

マルコの福音書 12章34節

「あなたは神の国から遠くない。」

イエス様はこのことばによって、一方において、質問した聖書学者を勇気づけ、他方において、質問した学者が、まだ神の国に入っていないということを指摘なさったのです。「あなたは神の国から遠くない」と。

こんにちも多くの人はこのように、「あなたは神の国から遠くない」と言われる状態にあるのではないのでしょうか。

必要なことは、「へりくだること」、イエス様を、「罪を赦すお方」として受け入れることです。

イエス様による贖いのみわざに感謝し、神の国に入ることができるように、イエス様を自分の救い主として信じ、受け入れる者は、きょう神の国に入ることができる、救われると聖書は記しているのです。

パウロは、当時の兄弟姉妹に書いたのです。

コロサイ人への手紙 1章13節

神は、私たちが暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。

これは救いです。暗やみの圧制から、イエス様のご支配の中に移されることです。

2. ある日、別の人がイエス様に従っていく覚悟をしたので、イエス様のところへ行きました。しかし、彼は、神の国を第一のものとは考えていなかったようです。イエス様は、彼に何と言われたのでしょうか。

ルカの福音書 9章62節

「だれでも手を鋤につけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくありません。」

ルカの福音書 18章29節、30節

「まことに、あなたがたに告げます。神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子どもを捨てた者で、だれひとりとして、この世にあってその幾倍かを受けない者はなく、後の世で永遠のいのちを受けない者はありません。」

3. ある教会に宛てられたことばです。

黙示録に書かれている、スミルナに住んでいる兄弟姉妹に向かって言われたことばです。

ヨハネの黙示録 2章9節前半

「わたしは、あなたの苦しみと貧しさを知っている。— しかしあなたは実際は富んでいる。—」

10節後半

「死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。」

イエス様はスミルナの兄弟姉妹におっしゃったのです。「あなたは富んでいる」と。

私たちがこのような者に属しているでしょうか。私たちは神の国に属し、永遠のいのちを持っていると、本当に確信しているでしょうか。

私たちは心の貧しい者でしょうか。自分の力で何かをしようとせず、常に、自分の思いではなく、主のみこころがなるようにと、心から祈っているのでしょうか。

ヨハネの黙示録 2章9節

「わたしは、あなたの苦しみと貧しさを知っている。— しかしあなたは実際は富んでいる。—」

マタイの福音書 5章3節

「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。」

了